がん抱え 働き続けるには

Next Ribbon

「ネクス
『患者が働
に』」（朝
・築地の浜
医師らによ
もあり、第
る課題を話
者らが患者

いなくても、東京都の推計では50人の会社で今後10年で新たにがんになる従業員が2・2人、1千人の会社だと43・7人いる。

日本では年間新たに約100万人ががんになり、うち3

とって非常に大きな課題になっている。

がんになっても早まって仕事をやめないのがまず重要。今はがんが完治してから復職するのではなく、仕事を持ちながら通院する方向にシフト

的な問題などの課題に直面しているが、企業も困っていることがある。従業員の病名や病状を情報共有できないときにどう対応するか。企業活動の質の維持と従業員支援のバランスをどう取るか。「同業

パネルディスカッションに多くの人が耳を傾けた

〈パネルディスカッション 第1部〉

がんを乗り越え働く

～日本社会、企業の課題とは～

【パネリスト】

天野慎介さん
（グループ・ネクサス・ジャパン理事長、全国がん患者団体連合会理事長）

大久保淳一さん
（NPO法人5 years代表）

武田雅子さん
（クレディセゾン取締役営業推進事業部長兼戦略人事部キャリア開発室長）

【コーディネーター】

竹下隆一郎さん
（ハフィントンポスト日本版編集長）

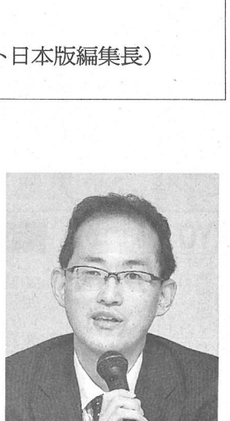
――がんと仕事にどう向き合ってきたか。

大久保 一昨年まで外資系投資銀行に15年勤めた。2007年に精巣がんを患った。当時42歳で、10カ月入院し1年半後に復職した。5年生存率という言葉が私はすごく嫌いで、がん患者を支援するNPO法人5yearsには、5年後には皆元気に活躍しているという思いを込めた。

武田 12年前に乳がんにかかった。当時、人事の採用担当課長で仕事がすごく楽しく、どう仕事と両立させるかを考えた。がんの告知を最初に伝えたのも上司。1カ月の入院準備後、3週間休み、復職した。

ホルモン治療の副作用でうつの症状が出て、苦しい思いもした。ある患者会に参加し、将来の不安などを自由に話せる場を得られ、大きな救いになった。今はがんと就労をサポートする法人の理事もしている。

相談する場 もっとあれば 天野


天野慎介さん

天野 27歳だった00年に血液がんである悪性リンパ腫を発症した。再発を2度経験したが、今は経過観察中。告知を受けた時は頭が真っ白になった。上司に伝えると驚かれたが、「しっかり治してこい」と気遣ってくれた。ただ、上司もがんに詳しくなく、治療が終わり復帰すればフルタイムでバリバリ働くという感覚が伝わってきた。抗がん剤治療で体力が落ちており、正直厳しかった。コミュニケーションがうまくいかず、自ら退社した。

――上司からの声かけや制度はどうすればよいか。

天野 当時は相談する場もなく、自分一人で抱え込んだ。コミュニケーションがもっとあれば、違う結果になったと思う。ならし運転的な働き方から徐々にフルタイムに移行できるような制度があれば。

武田 私も通常通り出勤できないと頭に浮かんだ。上司からは「どうしたらいいか教えて」と何度も言われた。ニーズを私自身が発信しないと周りは動けない。朝9時に病院の予約を入れ11時前ぐらいに出勤したので、朝のミーティングは部長に代理で出てもらったり、治療の影響で重い荷物を運びにくいので、外出では事前に現地に送ってもらったりした。

大久保 当時の会社の対応が非常によく、積極的にコミュニケーションをとってくれた。上司から「僕たちに何ができる?」とお経のように言われ、社長や副社長との面談もあった。社内のがん経験者の紹介も受け、相談相手になってもらった。こうしたメンター制度を作るのがとてもよい。

――メンター制度はすごくいいなと思う。

天野 メンターでもいいが、患者会でよくいうのはピアサポート。仲間、同じ立場の人が支え合う。就労でも同じ経験をした人の話は非常に参考になる。同じようながんの人がどうなったか、復職したかを知りたいというニーズは非常に多いので心強いと思う。

武田 私の会社にその制度はないが、私自身ががんであることをカミングアウトし、その後も働いている実績がある。がんになった時にカミングアウトしやすくなり、そのまま働く人もたくさんいるし、制度でなくても相談も自然にくるようになった。最近は社内で

復職 転勤感覚で関係作り 武田

武田雅子さん

病のタブー視 変えられる 大久保

大久保淳一さん

がんにかかった人同士の情報交換の場もできている。

――職場や働き方を変えるにはどうすればよいか。

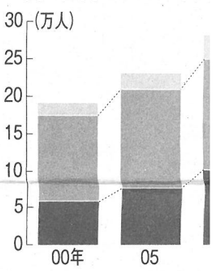
天野 がん患者がどう復職したのかの事例集があるといい。実際に復職した方々の知恵を集める。企業の人事担当者が参考にできれば、次の一歩につながる。

武田 私は復職が転勤の感覚に似ていると思った時にとても楽になれた。復職後は少し皆が引いている感じだから、自分で関係を作り直さないといけない。体調の悪い日があっても、やるべきことはやっていく。そうすると同僚との距離が戻り、スムーズにいく。

大久保 がんの後に元気になった人たちの情報を紹介していけば、がんをタブー視するようなことは変わっていく。もう一つはダイバーシティーが大切。人種、国籍、宗教、LGBT、既婚・未婚、女性の産休などが一切不利にならないという安心感だ。がんもその一つで、ダイバーシティーを推進するといろんな問題が解決される。がん患者は一日一日を充実させ生きようとする意識の高い人が多い。そういう人がいる企業は強い企業になる。

働く世代のがん患者が年々増える傾向
東京都福祉保健局の資料か

■働く世代でがんになっ



■今後10年間で新たにが
診断される従業員数（

全従業員数	今、職場にがん患者がいなくても… 今後10年間で新たになる従
50人だったら	▶2.2
100人	▶4.4
300人	▶13
1000人	▶43